



うりぼう

# 子どもの心の扉が開きます

## 《子どもの健やかな育ちを支えるプレイセラピー》

乳児院の心理士は、日々、子どもたちの遊び相手になったり、生活の様子を観察し、現場の職員と連携しながら子どもの心身の成長をサポートしています。特に、発達がゆっくりであったり、情緒的に繊細であったりと、より専門的な細やかなケアが必要な子どもについては、個別の関わりとしてプレイセラピーを行っています。生活の場から少し離れたプレイルームで様々なおもちゃを使用し、1回3~40分程度、週1回もしくは隔週1回といった頻度で心理士と遊びます。始めのうちは、知らない部屋に行くことや、心理士と二人きりで過ごすことに対して、緊張したり、不安な気持ちを表すことがあります。その場合はしばらくの間、現場の職員に付き添いをお願いしています。回数を重ねるにつれて、セラピーの空間が安心できる場所に変わっていき、のびのびと遊ぶことができるようになります。

セラピーの対象となっている子どもたちは、それぞれ目標を設定しています。いくつか例をあげると、

- ・運動面がゆっくりな子ども…『全身をしっかりと動かして遊ぶ経験を積み重ねることにより、全体発達を促す』
- ・言葉が少ない子ども…『遊びを通してやりとりを楽しんだり、見えるものや感じたことを心理士に代弁してもらうことによって、語彙を増やしたり、コミュニケーションの力を育てる』
- ・気持ちが不安定になりやすい子ども…『守られた空間で自分の存在を尊重してもらいたいながら、遊びをじっくり楽しみ、さまざまな感情を受けとめてもらうことによって、安心感や信頼感を育てる』

といった内容です。心理士は、遊びを通して、それぞれの子どもの目標に合わせた働きかけを行います。ただ、主役はあくまでも子どもです。心理士は子どもの興味の方向に添いながら、一緒に取り組み、試行錯誤し、様々な感情を共有します。何かを教えるというよりは、子どもと並んで歩む姿勢を心がけています。

このように、セラピーは心理士による専門的な関わりではありますが、使うするおもちゃは特別なものではありません。ボールハウスや車のおもちゃ、赤ちゃん人形やままごと、お絵かき道具や楽器、絵本など、2歳前後ぐらいの子どもに合わせたもので、一般的に販売されているものです。おもちゃの使い方にも特に決まりはなく、子どものひらめきや想像力を尊重しています。ただ、自分や心理士を傷つけたり、おもちゃを故意に壊す行為は禁止しています。

セラピーは、1回で変化が見られるものではなく、また、対象の子ども自身が急激に成長する時期と重なるので、それ自体の効果は見えにくいかもしれません。しかし、集団生活の場とは異なり、自分のことだけに注目してもらいたい、思いのままに遊ぶことができ、気持ちをしっかりと受け止めてもらえることは、子どもにとっては、嬉しい経験です。これは自尊感情や自己肯定感にもつながると考えられ、有意義な取り組みであると思っています。

乳児院臨床心理士 花木



ドックセラピー

H16年度より始まったドックセラピーが、今年度も子どもたちの楽しみとドキドキの中開催されました。犬が待っている部屋に入った瞬間、想像していたよりも大きな犬がいた為かみんな後ずさり…。そっと入室し距離をとつて座つていきましたが、気にはなるようで友達や保育士の陰に隠れながらも首を伸ばして見ていました。「アジル」「ろい」と2匹の名前を教えてもらうと少し怖い子は保育士と一緒に撫でることができるようになりました。

その後キャッチボールや牛乳をあげたりしていくうちに

に、こわばつていた子どもたちの表情は見る見るうちに和らぎ、犬に向ける視線や名前を呼ぶ声はとても優しくなつ

ていました。

お別れの時間になると、始める距離が嘘のように自ら

近寄り「バイバイ」と言って別れを惜しんで触れ合う姿

が見られました。まさか1時間ですが、セ

れどもやつぱり怖い子は保育士と一緒に撫でることで少しずつ触れ合

うことができるようになりました。

その後キャッチボールや牛乳をあげたりしていくうちに

に、こわばつていた子どもたちの表情は見る見るうちに和らぎ、犬に向ける視線や名前を呼ぶ声はとても優しくなつ

ていました。

お別れの時間になると、始める距離が嘘のように自ら

近寄り「バイバイ」と言って別れを惜しんで触れ合う姿